

エッセイ

芭蕉と映画

西田青沙 せいさ 泗楽会

芭蕉に映画などといささか突飛な取合わせだが、寺田寅彦の随筆に「一連句は日本人の過去、現在、未来の生きた生活の忠実なる活動写真であり、また最も優秀なるモニタージュ映画（「連句雑俎」）という言葉があり、また連句の正式な名称は「俳諧之連歌」というが、その俳諧の「俳」の字には「わざおぎ、役者」の意味があることをもって申訳とし、話を進めさせていただく。

早速、連句に馴染のない方のために芭蕉たちの作品の一部をご紹介しよう。

- ① 御頭へ菊もらはるゝめいわくさ 野坡
- ② 娘を堅う人にあはせぬ 芭蕉
- ③ 奈良がよひおなじつらなる細基手 野坡
- ④ ことしは雨のふらぬ六月 芭蕉
- ⑤ 預けたるみそとりにやる向河岸 野坡
- ⑥ ひたといひ出すお袋の事 芭蕉

芭蕉の新風を表したとして名高い撰集『炭俵』所収「梅が香に」の巻の裏一句目から六句目である。芭蕉のお相手の野坡（やば）

は越後屋（今の三越）の番頭である。

①の御頭は小筒組、槍組などの組頭。主人公はその配下の同心である。折角丹精した菊を褒め殺しにされ、「お気にめしたのをどれか一鉢」ぐらいは言わなければならぬ、それを迷惑だという。②は前句の菊を愛娘に取成して、悪い虫が付かないようにと腐心する父親。③の「奈良通い」は奈良の産物、たとえば奈良晒などを仕入れて、担ぎで町や村を売り歩く商人。おなじつら（面）は顔ではなく水準のこと。細基手（ほそもとで）は零細資本。奈良通いたちが溜り場になっている茶店での、前句の人物についての噂である。④も同じシーンでの会話。登場人物が輻輳したときなどに、軽く気分を変えたいときに使われるテクニクで、遣り句とか逃げ句とか呼ばれる。⑤は親戚で共同購入した味噌を誰かが誰かに向河岸まで取りにやるのである。⑥が付いてその事情が明らかになる。昔は一族のうちにご意見番の叔父さんという人が一人はいた。察するに、母親が息子に意見をしてもらいたくて、味噌を口実に叔父さんの所へやったのだ。叔父さん曰く「お前エのお袋はもう若くはねエし身体も丈夫な方じゃねエ。いつまでも遊び呆けていねエでどっかへ奉公して、そろそろお袋を安心させてやっちゃどうでエ」といった具合か。江戸の頃の町人の子は数え年七歳で寺子屋へ入門し、十一歳で奉公に出るのが普通だった。

このように、芭蕉たちの作品はどの句も登場人物たちが活き活きと息づいている。芭蕉以前の連句は、専ら言葉あそびに終始したが、芭蕉に至って生活者としての人物を登場させ、時にしみじみと、また時にはユーモラスにその日常を描いて見せた。それと、俳文学の研究者たちは誰もいわないが、作品の中に「見ている人」の眼差しを持たんだのも芭蕉たちの連句の特徴である。つまりカメラ・アイである。

次に、連句の第一句を発句（ほつく）、ホ句といい、それを独立させたのが今の俳句である。その芭蕉の発句を一二見てみよう。

一家に遊女もねたり萩と月 （おくのほそ道）

旅に疲れて宿の褥に横になっている芭蕉の姿を思い浮かべよう。寝つこうとすると一時間隔てた表の部屋から若い女たちの話声が聞こえてくる。ひそひそ話だろうにその内容まで丸聞こえなのである。新潟の遊女で伊勢参りにゆくのだという。その芭蕉をもう一人の芭蕉の視線が斜め上から見下ろしている。丁度絵物語でも見るように。

次にそのカメラが後方に引いてロング・ショットになる。すると屋内には芭蕉と、一時間隔てて物語りする若い遊女二人と見送り

の年寄りの姿。屋外には咲き盛る萩。そしてそれを白々と照らす月光。そんな情景になるうか。

連句のところであった「見ている人」の眼差しは作者以外の何者かだが、芭蕉の発句の場合は作品世界の中に必ず作者を置いて、さらにそれを見ているもう一人の作者の眼差しを意識しなければならぬ。それを見出すことで、読手は作者と一つになれる。

此秋は何で年よる雲に鳥 （笈日記）

芭蕉最晩年の作品である。芭蕉は、大阪の弟子たちの縄張り争いの調停に、故郷の上野を発ち、奈良で一泊。そして翌日、くらがり峠を越えて大阪に入った。近江の弟子の一人への書簡に「伊賀より大阪まで十七八里、所々歩いて、貴方と約束した旅の心だめしにと思いましたが、なかなか二里とは続きかね：：」と歎いている。よほど弱っていたのである。

峠道にさしかかって息を切らし、思わず立ち止って汗を拭きつつ顔を上げると、秋の空の遠い雲間に高く帆翔する鳥の孤影がある。まるで寄る辺ない己が魂のように。こんなシーンも如何にも映画的ではないか。芭蕉が現代に生れていたらさぞ優れた映像作家になっていたのではないか、と思う。